

カエルの繁殖騒動

●恋は盲目？

恋は盲目という言葉がありますが、繁殖期のカエルも盲目的です。

繁殖期のオスは、カエルぐらゐの大きさで動いているものならなんでも、とりあえず飛びついて、抱きついてみるという性質を持っています。これは反射的な行動で、赤ちゃんが、なんでも手に取ったものはとりあえず口に持っていく動作と同じです。他種のカエルだろうが、オスのカエルだろうが、ゴム長靴だろうが構いません。そのため、繁殖期の水辺は騒々しくなります。なにせ、繁殖の情熱の炎にかられたオスがいきなりたくさん現れるのですから…。

産卵を既に終えたメスは、「解放コール」と呼ばれる独特な鳴き声の信号を発します。それを聞いたオスは相手を離してやります。抱きつかれても解放コールを発しない個体は卵を抱えたメスというわけです。

しかし、そう単純でもありません。抱きついて鳴かず、しかも弾力のあるものと間違いに気付かないこともあります。

卵を抱いた他種のカエルのメ스에抱接した例、メスと間違えて魚やサンショウウオな



ヤマカガエルに抱きつかれたシュレーゲルアオガエル



オスに抱きつくこうとするオス (シュレーゲルアオガエル)



オスとメスの間に強引に割り込もうとするオス (アズマヒキガエル)

どの他の生き物に抱きついた例、さらにはオスに抱きつかれてもなぜか解放コールを発しないオスの例、水の溜まったビニールの買い物袋をしきりに抱きしめていたヒキガエルの例などが観察されています。

●カエル合戦とカエル相撲

ヒキガエルの場合、繁殖期間が短いため、狭い範囲に多数のオスとメスが入り交じって産卵が行われます。この光景は、あたかもカエル同士が争っているように見えるので、「カエル合戦」と呼ばれます。いにしえの人々は、この様子を異常の前兆と考えて注目し、平安・鎌倉時代に記された「続日本紀」や「古今著聞集」などにも記録が見られます。また「やせガエル負けるな一茶これにあり」という小林一茶の有名な句は、ヒキガエルのカエル合戦を見物して詠んだ句と言われています。近年、カエルの個体数の減少が著しく、カエル合戦に参加する個体数が少なくなり、2~3つがい、あるいは5~6つがいのカエルしか見られないことも多くなっています。これでは「合戦」と言うより、ただの「喧嘩」です。

一方、トノサマガエル、ダルマガエル、トウキョウダルマガエル、カジカガエルなどは、長い繁殖期間を持つため、動き回ってメスを探すことはなく、大きな声で鳴いてメスを誘う方法を採用します。オスたちは互いに牽制しあいながら距離を置いて鳴くこととなりますが、鳴くの都合の良い場所やメスが来てくれそうな場所はたくさんあるわけではありませんので、鳴き場所を巡ってオス同士の喧嘩が起こることになります。通常、喧嘩は鳴き声で行い、鳴くのを止めた方の負けとなります。たまに、どちらもあきらめないことがあり、激しく鳴き交わしながらお互い近づき、あげくには相撲さながらの取っ組み合いをする場合があります。なお、平安時代末に鳥羽僧正によって書かれたといわれる「鳥獣戯画」には、トノサマガエルとウサギの相撲が描かれています。

コラム

両生類観察の楽しみ

梅雨時から夏にかけて水田で鳴くカエルの声は、日本の風物詩として代表的なものです。両生類を調べるには、その生態を知っていると効率的な観察もできます。冬に天竜川沿いの棚田を訪れた際に、田んぼの隅にあった水溜まりで越冬するツチガエルのオタマジャクシを見つけました。このように、その生態を知っていれば「まさかこんな時期に」と思われる状況であっても、その存在を確認することができます。ツチガエルは幼生で越冬する本州では数少ないカエルの一種で、そのための環境が不可欠なこともあってか、最近は目にする機会が減っています。

両生類の仲間は、産卵時に何らかの水場に集まるものが多く、この時期はこれらの生き物を効率良く観察できる絶好のチャンスです。一般に、カエルはいつも水田や川などの水環境にいると思われていますが、実はそうでないものも多いのです。

例えば、春一番に田んぼや湿地の水溜まりに産卵するヤマアカガエル、「ガマガエル」の呼び名でお馴染みのヒキガエル、初夏の清流に美しい声を響かせるカジカガエル、泡状の卵を木の枝などに産むモリアオガエル、同じ泡状の卵を田の畦や土手の土中に産むシュレーゲルアオガエル、溪流の枝沢などに産卵するタゴガエルなど、一般にはあまり知られていないカエルもいますが、これらのカエルたちは繁殖期以外は森林や草地（中には樹上など）で生活しています。反対に、あまり水辺から離れないのが、ウシガエル、トノサマガエル、ツチガエル、アマガエルなどです。

雨降りの夜はカエルに出会うには良いのですが、多くのカエルが路上でクルマに轢かれて犠牲になります。自分も轢かれてしまわないように気をつけたいところです。

山沿いの水田や湿地などでは、同じ場所に何種類かのカエルが季節をずらして産卵にくるため、春から夏にかけていつでもオタマジャクシを見ることができます。順次、変態を終えて子ガエルとなって上陸していくので、当然同じ種類のものではありません。オタマジャクシは人間の子どもたちにも簡単に見つけられ、また捕まえることができるので、良い遊び相手になると同時に、さまざまな生き物達の餌資源となっています。春一番に産卵された卵から早々に孵るヤマアカガエルのオタマジャクシの群れを、まだ餌の少ない春先にアテにしている生き物はいはずです。成体のカエルも同様で、タヌキ、イタチなどの哺乳類、猛禽類やサギ類などの鳥類、ヘビ、水生昆虫など多くの生き物たちの餌資源となり、いわば地域毎の生態系の基盤を担っている集団の一つです。カエルはふつうであるがために貴重な生物なのです。

日本はその狭い国土の割に、サンショウウオの種類が豊富です。森林が国土の8割を占めていますから、森林と密接な関係にあるこの生物は、日本の緑の豊かさを象徴しているようです。サンショウウオも繁殖期以外には森林の林床など湿気のある陸上で暮らし、成体の姿を野外で見つけるのは非常に難しいといえます。しかし、ハコネサンショウウオの幼生などは、溪流の伏流水の出口付近の石の下から比較的簡単に見つかります。子どもたちとこのような場所に出かけた時には、注意深く石をひっくり返して、まだ外鰓を付けたひょうきんな顔立ちの幼生を捕まえて観察します。サンショウウオには人間の手は暖かすぎますから、手を水で冷やしてから、手の上に乗せるとよいでしょう。通常2つのサイズの幼生が同じ場所で見つかり、大きい方は全長7~8cmある2年目の幼生で、中には目が上部に突き出してきて上陸まで間もない個体も確認できます。小さな方は1年目の幼生です。ヒダサンショウウオの幼生も同様な環境にすみ、両種が混生している場所もあります。ハコネサンショウウオの卵塊は伏流水のトンネルの中などに産み付けられ、これも目にするのは難しい種です。

イモリは昔から、その名の通り「井」（用水の意）を守る生き物として用水路、田んぼ、池、沼など身近な水環境で見られましたが、これらの環境でイモリが見られる場所は少なくなってきています。しかし、山上の湿地や池ではまだ多くのイモリを見ることのできる場所もあります。イモリも繁殖期に多数が集まり、水草や水底に堆積した落ち葉に挟むような格好で寒天質に包まれた卵をひとつずつ産み付けます。

この時期は昼間でも水底の落ち葉の下や石の下に潜むイモリや、時にはオスがメスの目の前で尾を小刻みに振る「求愛行動」も観察できます。イモリは体に毒腺を持つためか、意外に天敵の少ない種です。イモリが多く産卵にやってくる山上の池に、近年、生態系への悪影響が懸念されるブラックバスが、釣り人により放流された場所がありますが、2年間の観察では今のところ著しい影響は感じられません。さしものブラックバスもイモリは食べられないのでしょうか？今後も継続して観察を続けていきたいと思えます。

長い稲作文化の歴史とともに、その生息数を増やしてきたカエルに代表される両生類の仲間たちは、近年、ヒトの暮らしと稲作の変化とともにその数を減らしています。昨今、「天然記念物」に代表されるような「希少種」の生物に対する一般の認識は高まりつつありますが、多くのありふれた生き物たちが地域毎の生態系の基盤を担っていること、また、その「普通種」の生物が、ヒトに軽んじられるがゆえに個体群の単位ではどんどん絶滅の危機に瀕している、という事実にも目を向けて欲しいと思えます。

(前澤 勝典)

はちゅうるい
爬虫類はちゅうるい
天竜川流域の爬虫類相

天竜川流域では、カメ類4種、トカゲ類3種、ヘビ類8種の記録があります。これらの多くは本州に広く分布している種類です。その生息環境は河川や池、沼などの水辺から農耕地、水田、市街地、段丘林、山地など多岐に渡っています。爬虫類はこのように分布域が広く、さまざまな環境に生息する動物です。

●カメ類

クサガメ、イシガメ、スッポンは、愛知県では繁殖が確認されていますが、天竜川上流域で繁殖しているのかどうかについては、今後明らかにされなければなりません。イシガメは下伊那における自然分布が示唆されていますので、繁殖している可能性は高いと考えられます。しかしながら、水辺環境の変化によって産卵地が破壊されている可能性もあるため、絶滅あるいは絶滅に瀕している地域もあると考えられます。

ミシシippiaアカミミガメ（ミドリガメ）は外国からの帰化種（移入種）で、天竜川でも確認されています。恐らく、ペットとして飼われてきたものが捨てられたものと考えられます。天竜川上流域で繁殖しているかどうかは不明ですが、もし繁殖しているとすれば在来種への影響も懸念されます。

●トカゲ類

トカゲやカナヘビは、ガレ場や草地などの生息適地さえあれば、ふつうに生息しています。これらのトカゲは人家の庭先や石垣の上などでもよく見られます。

ヤモリは、長野県内での確認例はほとんどありません。しかし、人家や建物付近に多く生息するため、輸送車などによって運ばれてくることもあり、人家付近で目撃される可能性はあります。現在のところ、天竜川上流域にはほとんど定着していないと考えられます。

●ヘビ類

シマヘビ、アオダイショウ、ジムグリ、ヤマカガシはさまざまな環境に幅広く生息しています。特に、シマヘビは水田などのある平地部ではよく見られるヘビです。地域によってはあまり見られないジムグリも山地の多いこの地域ではふつうに生息する種類です。

ヒバカリやマムシは、昔ながらの自然環境が保たれていなければ生息することが難しいため、近年ではその数が減少しているようです。

夜行性のヘビであるタカチホヘビやシロマダラは発見の難しさと生息場所の局所性が相まって、確認記録が非常に少ないヘビです。しかし、今後の調査の進展によっては山地を中心に生息地の情報が増加していくと考えられます。

天竜川流域で記録されている爬虫類

種名	諏訪盆地	上伊那	下伊那	愛知・静岡
クサガメ	□	□	□	○
イシガメ	□	□	□	○
スッポン	—	—	□	○
ミシシippiaアカミミガメ*	—	○	—	○
ヤモリ	—	—	—	○
トカゲ	○	○	○	○
カナヘビ	○	○	○	○
タカチホヘビ	○	○	○	○
シマヘビ	○	○	○	○
ジムグリ	○	○	○	○
アオダイショウ	○	○	○	○
シロマダラ	○	○	○	○
ヒバカリ	○	○	○	○
ヤマカガシ	○	○	○	○
マムシ	○	○	○	○

○ 現在も生息している □ 人が移入し放逐したとの記述
— 生息の記録はない
* 北米原産の帰化種

クサガメ・イシガメ (カメ目バタグールガメ科)

《クサガメ》

●臭いからクサガメ

クサガメは日本の本州、四国、九州、および朝鮮半島、中国、台湾に分布します。主に水底が砂や泥よりなる平野部の池や川に生息し、水かきの発達している遊泳性のカメです。昼行性で日光浴を好み、「甲羅干し」の姿をよく見かけます。これは、体温の調節と皮膚病の予防、ビタミン補給のためといわれています。

メスは甲長が25cmに達するものもありますが、オスは20cmを超えることはあまりありません。オスは成長して高齢になると、

身体の隅々まで黒くなります。黒化するのはオスだけで、メスは体色が褪せて黒っぽくなることはあっても完全に黒化することはありません。

クサガメの名の由来は「草亀」ではありません。腋下甲板（鼠蹊）にある臭腺から独特のにおいの物質を分泌するため「臭亀」と呼ばれます。背甲の中央に一本、左右に各一本の計3本のはっきりした隆起が走っていることで日本に生息する他のカメと区別することができます。また、頭部から首にかけての側面と底面には黒い縁のある鮮やかな黄色い模様があります。

イシガメに比べると体の大きさに対して頭部が大きく、丈夫なあごでタニシやカワニナなどの貝類、ザリガニ、魚などの死体、昆虫類や水草などいろいろなものを食べます。

冬季は岸辺の横穴や池沼の深みなどで冬眠します。産卵期は6～8月にかけてで、後ろ足で産卵巣を掘り、明け方に産卵します。イシガメよりもやや小さい卵を8～10個ほど産みます。イシガメは大卵少産で、クサガメは小卵多産の傾向があると言えるでしょう。卵は2～3カ月で孵化しますが、孵化個体はふつうそのまま産卵巣で越冬し、翌年の春に地上に出てきます。孵化個体の甲長は3cm弱です。最近では、イシガメではなくクサガメの幼体が「ゼニガメ」の商品名で販売されていますが、孵化直後の0歳のクサガメの背甲は黒っぽい色をして、甲羅は楕円形なので実際には「銭」には見えません。



クサガメ (撮影：松橋利光)
背甲長：最大でオス20cm、メス30cm前後。体重：メス背甲長20cmで1200g。雑食性。流れの緩やかな河川や低地の湖沼に生息。春と秋に水中で交尾。産卵回数は年1～3回。寿命35年（飼育下）。

●天竜川周辺での生息状況

西日本ではごくふつうに見られるクサガメですが、天竜川流域ではほとんど見つかりません。記録も少なく、諏訪市、南箕輪村、阿南町、静岡県では磐田市からの報告があるに過ぎません。個体数も相当少ないようです。ただ、阿南町では繁殖している例があるようです（長野県動物図鑑（信濃毎日新聞社））。イシガメと同様に、ほとんどの報告で、飼育されていたものが放逐されたり逃げ出したりしたものとされています。

●愛玩動物（ペット）として流通するクサガメ

クサガメは人に馴れやすく、しかも孵化した子ガメが翌年の春に地上に現れるという性質は、水遊びの季節の始まり、つまり初夏に出荷するのに都合が良いので、愛玩動物として大量に市場に出回っています。国内では休耕田などを使い、池を掘って養殖している業者もあり、中国から安価な子ガメが輸入されてもいるようです。

《イシガメ》

●日本列島に固有なイシガメ

イシガメは日本固有種で、本州、四国、九州に分布します。平地の河川や湿地でも見られますが、主に河川の上流から中流域や山際の湖沼などを生息場所としています。

メスの方がかなり大きく、メスの甲長は20cm、オスは12cmくらいで、メスの体重はオスの5倍ほどにもなります。背甲に縦に走る隆起があまりはっきりしないことや、背甲の後縁がのこぎり状のギザギザになっていることで、日本に生息する他のカメ類と区別できます。背甲は黄色ないしは黄褐色、腹甲は黒色で頭部はやや緑がかかった灰褐色をしています。

求愛交尾は春と秋に行なわれます。この季節にはオスがメスの鼻先で掌を外側に向けた前肢を数回ずつ交互に揺らして求愛します。メスが求愛を受け入れて動きを止めると、オスはメスの後ろに回り込み、馬乗りになって交尾します。

冬季は水中の横穴や淵の泥や落葉の堆積物の下で越冬します。産卵はだいたい6～7月にかけての明け方に行なわれます。メスのカメが後ろ足をスコップのように器用に使い、地面にとっくり型の穴を開け、長さ約4cm、幅約2cmの楕円体の卵を6～7個産み付けます。この卵は2～3カ月後には孵化し、秋には甲長3.5cmくらいの子ガメが地面に出てきます。子ガメは成体よりも甲羅の幅が広く丸見え、色も黄土色なので「ゼニガメ」と呼ばれます。

雑食性で、魚や鳥の死体、サワガニ、昆虫、オタマジャクシなどの動物質のものから、ツククサの葉、地面に落ちたヤマモモやアケビやカキの実などの植物質のものまで、多種多様なものを食べています。

●天竜川周辺での生息状況

天竜川上流では、1991年頃に飯田市の数箇所ではイシガメが確認されています。ただ、目撃された個体数は少なく、また、見つけられた場所の一つは開発予定地であったことから、現在も生息しているかわかりません。

市町村誌などによると、天竜川流域では、諏訪市、高遠町、辰野町、南箕輪村、伊那市、中川村、松川町、喬木村、飯田市、下条村、泰阜村、愛知県の豊根村、静岡県の龍山村、磐田市でイシガメが記録されています。

多くの市町村誌では、イシガメは人が移入し、放逐したものとしています。しかし、本当にそうでしょうか？ 上述のように、天竜川流域では伊那谷を中心に多くの場所でイシガメが記録されています。また、地勢を見ても、カメが生息すると考えてもおかしくはありません。このため、たとえ細々とでも天竜川流域にはイシガメが自然分布している可能性の方が高いように思われます。市町村誌などではイシガメとクサガメを混同しているケースがあるかも知れませんが、少なくとも淡水性のカメがその地域に生息しているということの参考資料にはなると思います。これまでに蓄積された情報を踏まえ、今後詳細な分布や生息密度を調べて行く必要があります。

●天竜川はカメの境界線？

天竜川は、カメが多い西日本と少ない東日本の境界であるかも知れません。本州の太平洋側では、天竜川の西の三河・美濃地方では開発などの影響で最近少なくなってきたものはいるものの、池や川でふつうにイシガメを見ることができます。ところが天竜川よりも東の地方では、ところどころに密度の高い分布地があるとは言え、全体的にはカメは少ししか生息していないようです。天竜川が日本のカメの分布に何らかの意味を持っているのかもしれません。

(矢部 隆)



イシガメ (撮影：松橋利光)
背甲長：最大でオス14cm、メス21cm前後。体重：メス背甲長18cmで750g。雑食性。河川の上・中流域、山間や山際の湖沼、低湿地に生息。春と秋に水中で交尾。産卵回数は年1~3回。寿命20~30年以上。

コラム

増えつつある帰化ガメ

ミシシippアカミミガメ・スッポン・カミツキガメ

最近、カメの世界では帰化ガメが大きな問題になっています。

帰化ガメの代表格はミシシippアカミミガメです。北米のミシシipp川下流域が原産のカメで、30年ほど前から幼体が「ミドリガメ」という商品名で愛玩動物として大量に流通しています。正確な資料はありませんが、日本には1年間に100万頭前後が輸入されているとも言われています。

天竜川上流域では、駒ヶ根市、箕輪町で確認されており、今後の分布拡大が懸念されます。幼体は500円玉くらいの大きさで、体色は鮮やかな緑色をしており、耳の後ろにオレンジ色の模様があります。しかし成体になるとオスは甲長20cm、メスは28cmにもなり、在来イシガメやクサガメよりも大きくなります。美しかった体色も成長するにつれ色あせていき、くすんだ色になります。さらに、クサガメと同じようにオスは黒化します。また、大きくなると凶暴性を帯び、噛みつくようになります。しかもこのカメはいわゆるサルモネラ菌の宿主としても有名になってしまいました。

それらのことから、無責任な飼育者によって全国各地で野外に放逐され、現在では繁殖している地域もたくさんあります。生態学的な観点から見れば、食物、あるいは日光浴や産卵や越冬の場所をめぐって在来イシガメやクサガメと競合し、それらの生息に悪影響を与えている可能性もあります。実際、在来カメと混生している池では、ミシシippアカミミガメの方が在来カメよりも上手に素速く採食するのがしばしば観察できます。

スッポンは、本州、四国、九州、琉球列島、国外ではモンゴル、朝鮮、台湾、中国、海南島、インドシナ北部などに分布していますが、食用にするために養殖されたり頻りに流通する機会が多く、土着か移入かがはっきりしない地域がたくさんあります。スッポンの甲羅には甲板がなく、背甲の前縁や後縁、それに腹甲が柔らかく、鼻先がとがっていて他のカメとは形態が著しく異なるので、比較的簡単に見分けることができます。



ミシシippアカミミガメ (撮影：松橋利光)
背甲長：最大でオス23cm、メス28cm前後。体重：メス背甲長20cmで1400g。雑食性。比較的流量が多く、流れの緩やかな河川や低地の湖沼に生息。国内での繁殖生態は不明。寿命20年前後。

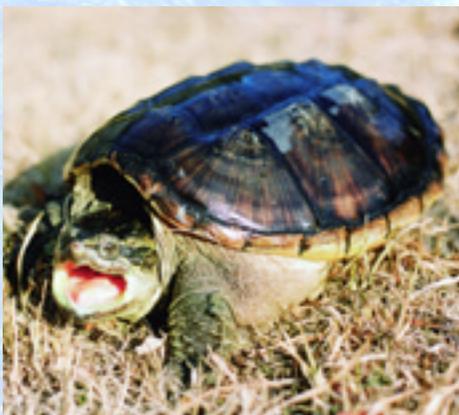
天竜川上流域では飯田市で、昭和初期に養殖されていたものが逃げ出し、その子孫がしばらく採集されることがあったようですが、最近では確認されていないようです。また、静岡県磐田市でも戦後に捕獲されたことがあったそうです。天竜川河口の西側にある浜名湖ではスッポンの養殖がさかんなので、逃げ出したものが天竜川水系に紛れ込むことがあるかも知れません。人為的に移動されたものが野生化すれば在来のスッポンとの交雑が危惧されます。また、臆病な性格であるがゆえにすぐに噛みつくため、人体への危険もあります。



スッポン (撮影：松橋利光)
背甲長：最大35cm。体重：メス背甲長19cmで1,000g前後。肉食性だが、飼育下では植物質も食べる。河川中流域、大型の湖沼などに生息。飼育下で寿命15年以上。

天竜川流域からの報告は今のところありませんが、今後移入される可能性があるものとしてカミツキガメが挙げられます。

このカメは五大湖などカナダ南部から合衆国、中央アメリカを経てエクアドルにまで分布している順応性の高いカメです。最近では甲長5cmくらいの幼体が愛玩動物として1,000円前後で売られています。しかし、成長すると大きいものでは甲長45cm以上、体重30kg以上にもなります。また、その名の通りきわめて荒々しく凶暴な性格を持っているため、飼いきれなくなった個体が全国各地で野外に放逐され、問題となっています。千葉県北西部の印旛沼水系ですでに野外で繁殖していると考えられています。人間にとっても危険な動物ですし、大食漢なため、地域固有の生き物が大量に捕食されて生態系が攪乱される危険性が高く、この種の帰化定着は阻止しなければなりません。



カミツキガメ (撮影：野呂達哉)
背甲長：最大45cm。体重：成体の平均は4,000g前後。野生の個体で35kgに達するものもある。肉食性。原産地では河川、湖沼、市街地の小さな池などに生息。

(矢部 隆)

コラム 天竜川のつくるウミガメの産卵地

渥美半島伊良湖岬から御前崎にかけての遠州灘に面した海岸線には、アカウミガメが産卵に上陸する砂浜がたくさんあります。

アカウミガメは熱帯域だけでなく温帯の水域でも産卵する唯一のカメです。成体は背甲長80~100cm、体重100~150kgにも達します。遠州灘での産卵期は7月前半をピークとして5月から9月の間で、メスは2~3週間の間隔を置いて数回産卵します。直径約40~45mmの球形の卵が1回の産卵につき約120個産みつけられます。

日本で孵化したアカウミガメの稚ガメは、北太平洋を右回りに流れる暖流に乗って数年間漂いながら大人になり、また日本近海に戻ってくるようです。北アメリカ大陸沿岸を経由する個体もわずかながら見つっていますが、西太平洋には産卵地はないようです。つまり琉球列島から南関東にかけての日本沿岸は、北太平洋のアカウミガメの重要な産卵地であり、とりわけ遠州灘に面した海岸は、アカウミガメの産卵地の北限に近いにもかかわらず、10年以上前には数百以上の産卵が見られた場所で、集団の維持という観点からも重要な地域だと言えるでしょう。

遠州灘沿岸では浜ごとに保護団体がウミガメの産卵状況の調査と、浜の清掃など産卵環境の整備に努めています。ところがそのような人々の熱意にもかかわらず、産卵のために上陸するアカウミガメの数は年々減少しています。たとえば愛知県豊橋市の表浜では、1992年に確認された産卵巣は136巣あったのに、93年には97巣、以下97年までに53巣、65巣、61巣、7巣と減ってきています。このような産卵の減少の原因の一つに、遠州灘沿岸の砂浜の奥行きが狭くなり、砂浜が小さくなっていることが考えられます。

遠州灘に面する海岸の砂は、おもに天竜川から運搬され供給されたものです。河口付近の沿岸流は、西向き（伊良湖岬の方向）に年間12万トン、東向き（御前崎の方向）に14万トン、計26万トンもの砂を流すと見積もられています。ところが天竜川に多くのダムが建設され、海岸の砂浜への供給がなくなってしまいました。1956年に完成した佐久間ダムは、1990年にはダムの容積の約半分が土砂で埋まっています。現在の天竜川が運ぶ土砂は年間16万トンと見積もられ、あと10万トン運ばれないと沿岸の砂浜はやせていく一方ということになります。山と海が繋がっていることを知らされる事例です。

ダムの他にも、消波ブロックの設置や海岸の護岸工事、ゴミ、海岸の照明、海岸に乗り入れる四輪駆動車やキャンパー、海での混獲など、ウミガメをめぐる環境は急速に悪化しています。

カメの歴史は2億年以上、ウミガメの系統も1億年前には成立していました。ヒトの系統が類人猿から分岐する500万年前には、すでにアカウミガメは存在していました。こんなにも永い年月を、地球の環境とうまく折り合いながら生き抜いてきたウミガメ達のことをぜひ知って欲しいと思います。

(矢部 隆)

トカゲ (トカゲ目トカゲ科)

北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に分布します。全長20cm前後で、体表には光沢があり、派手な美しさを持っています。このようなトカゲの仲間はスキンクと呼ばれ、似た仲間が世界中に分布しています。

トカゲの主な生息環境は岩盤の露出した場所やガレ地など隙間の多い環境ですが、草地などでも見ることができます。また、このような場所だけではなく、アスファルトの路上や石垣、集石地などの人工物を利用して日光浴をしていることもあります。昼行性で日の差す明るい時間帯に活動し、昆虫やクモなどを追いかけて捕らえます。天候の悪い日や夜間には、石の隙間や土中に空いた穴などに潜んでいます。



トカゲ

頭胴長60~96mm、尾はその1.5倍の長さ。体重5~18g。低地から高山まで生息。河畔などの日当たりの良い場所を好む。石垣などの隠れ場と日光浴に適した場所があれば市街地でも見られる。4~5月が交尾期で、6月に産卵。

●日光浴

日中、石の上などで日光浴をするトカゲの姿を見かけることがあります。日光浴は変温動物であるトカゲにとって、体温調節という重要な意味を持っています。また、カルシウムの吸収にとっても重要な働きをしています。日光浴をして体温が上昇したトカゲの動きは素早く、人や天敵が近づいた時には、さっと石の隙間や穴などに逃げ込みます。しかし、石などをひっくり返して、たまたま休息中のトカゲを見つけた時は、体温が下がっているため動きが鈍く、簡単に捕まえることができます。

●体色の変化

トカゲの体色は成長の過程で著しく変化していきます。幼体では尾が青く、背面に五本の黄色いストライプが走りたいへん美しいのですが、成体になるにしたがって徐々に茶褐色に変化していきます。幼体の頃の体色はメスの方が遅くまで残っていますが、結局はメスもオスと同じように茶褐色になってしまいます。オスは春の交尾期にはのどからお腹にかけて赤色の婚姻色が見られ、非常にきれいです。

●卵の世話をする

爬虫類はニシキヘビやワニなどを除くと、卵の世話をする種類が少ないのですが、トカゲのメスは自分の産んだ卵の世話をします。石の下や隙間に産みつけた卵を舐め回したりしながら、孵化するまでそばにいます。石をひっくり返して小動物を探している、ごく稀にトカゲのメスと卵を発見することがあります。



トカゲの幼体 (背面の黄色のストライプと青い尾が特徴)

●天竜川周辺での生息状況

天竜川の河川敷では巨大な石が重ねられた集石地で日光浴をしている姿を少数ながら確認しました。このような場所は河川敷に一樣に分布しているわけではなく、河川に沿ってパッチ状にありますので、おそらくトカゲもそのような場所を中心として生息しているのでしょうか。その他、草地などでも見られますし、蛇カゴ付近にも生息しているのかもしれませんが。動きが素早いトカゲですので、調査中に見逃している数も少なからずいると考えられ、もしかしたら、もっとさまざまな場所に生息しているのかもしれませんが。伊那谷の山地でも林道などでよく見かけます。林からの木漏れ日が地上を照らしているような場所があった場合、注意深く地面を見ていると日光浴をしているトカゲの姿を観察できることがあります。



尾を自切したトカゲの幼体



トカゲの生息場所となっている集石地